

「本物の感動に出会う教科書」

平成二十四年度版「国語」のご紹介①

教科書

新しい教科書の大きな特徴の一つは、生徒の心を揺さぶり、豊かな言葉を育む教材がさらに充実したことです。

磨き抜かれた言葉と、個性的な視点によって生み出された質の高い教材は、生徒たちの心に新鮮な感動を呼び起こし、新たな言葉の世界への架け橋となります。

今回の特集は、「読むこと」の領域をクローズアップし、さまざまな角度から、新しい教材の魅力を紹介していきます。

豊かな言葉をつむぐ

対談

馬場あき子

宗我部義則

歌人

お茶の水女子大学附属中学校教諭

馬場先生には、平成二十四年度新版の二年生教材に、「新しい短歌のために」を書き下ろしていただきました。

この対談では、教材に取り上げられた短歌の鑑賞や実作の体験などについて、宗我部先生が馬場先生に聞きながら、豊かで美しい日本語とは何か、それを生徒に伝えていくにはどうすればいいのかを探っていきます。

短歌を好きになってほしい

宗我部 まず、この教材で、いちばん伝えたかったことからおうかがいします。

馬場 それは、なにより、中学生に短歌を好きになってもらいたいという思いです。現代の日本語は、響きや余韻、韻律というものを失っているのではないかと思います。詩や歌曲をはじめ、いろいろなものが散文的になっていきます。だからこそ、これからの時代を生きる子どもたちには、響きや韻

律による言葉の豊かさ、美しさ、うるおいといったものにしっかりとふれてほしいと思っています。

宗我部 私も現場での経験から、言葉のリズムを子どもたちに教えるのは、やはり短歌や俳句といった伝統的な詩歌が最もふさわしいと感じています。

馬場 それは、千三百年、日本語を磨いてきたのが七五調の韻律だったからだと思うんですよ。五・七・五・七・七という型を砥石として、それに言葉をかけて磨きをかけてきてきたのが日本語と言ってもいいんじゃないでしょうか。だから、そういうリズムは日本人の体が伝えているんですね。

うんです。しかし、この七五調に乗せると、何気ない言葉が、作品として「立ち上がる」気がすると言います。子どもたちはとても喜んで作りますよ。

馬場 そうでしょうね。俳句ももちろんですが、短歌の五・七・五・七・七というリズムに乗ると、日本的気分というものが味わえるので、嬉しく感じるんでしょうね。日本人は型が好きなんです。お花もお茶も、能も歌舞伎も、伝統芸能といわれているものはみんな型の芸術ですよ。ヨーロッパやアメリカでは個々の人がフォルムを生み出しますが、日本人はこの型を共有して、千年以上も使ってきました。

この教材は、日本人が伝えてきたそういう特有の韻律の面白さと、それが生み出す

言葉の力を知ってもらえるといいなと思います。ながら書きました。

教材の選歌に込めた思い

宗我部 この教材には六首が取り上げられています。どんな思いを込めて選ばれたのでしょうか。

馬場 最初に正岡子規の歌を置きました。

くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の
針やはらかに春雨のふる（※）

私も長い間、中学校や高校の教師をやっていました。そのときに、正岡子規とか、島木赤彦といった写生風の歌は全部飛ばして教えていなかったんです。内緒ですけど（笑）。生徒はきつと面白くないだろうと思って。でも、今、こういう歌は子どもたちにとっては、かえって新鮮ではないかと思うようになりました。

宗我部 この歌を子どもたちが読むと、「くれなるの薔薇の芽」というのは、どこのことなんだろうと、まず気にすると思うんです。「薔薇の花芽だから赤いんじゃないか」とか、「何か、とげの辺りもちよっと赤いよね」とか、子どもどうして、いろいろな解釈について交流を始めます。



※本文で取り上げた短歌は、字詰めの都合で、すべて2行に分けて表記しました。



馬場あき子

歌人。文芸評論家。日本芸術院会員。朝日新聞「朝日歌壇」選者。東京都生まれ。中学校、高等学校で29年間教師を務めるかたわら、窪田章一郎の「まひる野」に入会し作歌に取り組む。現在、短歌結社「かりん」を主宰。歌集「葡萄唐草」で逖空賞、「月華の節」で詩歌文学館賞、「阿古父」で読売文学賞を受賞したほか、毎日芸術賞、朝日賞など受賞多数。平成15年に日本芸術院賞。「晶子みだれ髪」「額田王」などの新作も手がける。評論に「鬼の研究」「女歌の系譜」など。

馬場 そういうことを敏感に気づいてくれるのはうれしいですね。私が、この歌を選んだのは、まさに「くれなゐ」という言葉が秘める力に注目させたいと思ったからなんです。科学的にいえば、「芽」は緑がかった茶褐色とか、緑からちよつと赤っぽくなっているという表現が正しいんでしょうか。だから、そうした色味を、ひと言「くれなゐ」と表現したとき、嘘を言っていることになる。でも、そこには美しさが生じます。そして、芽の色を「くれなゐ」と認めるときに、そこに薔薇の芽の生命をも感じ取るのです。「緑がかった茶褐色」では命を感じないでしょう。

宗我部 「針」についても、とげのことだと言う子もいれば、新芽の先端のことだと言う子もいる。とても面白い授業の導入ができるんじゃないかと思います。

馬場 そうですね。「針やはらかに」という表現だから、そうした多様な読みができるんです。さらに、「やはらかに」春雨が

降りかかる。「針やはらかに」というのは、針も柔らかいけれど、春雨も静かに柔らかに降っているという意味ですね。二重に「やはらか」なんです。そういうところにも気づかせてあげれば、鮮やかに情景がイメージできるのではないかなと思っています。

宗我部 今だったら、この歌は飛ばさないで教えられますよね（笑）。

馬場 ほんと、そうですね（笑）。子どもたちに、「くれなゐ」、これは、命の色だよ」って言ってあげたい。

蚊帳の中に放ちし螢タされば
おのれ光りて飛びそめにけり

斎藤茂吉はこの歌を取り上げました。この「おのれ光りて」も「くれなゐ」と同じで、命がこもった言葉です。自分の生命が光るんです。大人にならないと理解するのが難しいかなと思うんですけど、自ずから発光しているという生命力を、この言葉から感じてほしいと思って取り上げました。

ころを見せようという方法です。

宗我部 晶子のほうが古典的というのは面白いですね。むしろ時代の新しさを打ち出しているこうした歌人のようなイメージがあったんですが。

馬場 晶子にも、もちろん恋愛をテーマとしたものなど新しい歌はありますが、私はこんな古典的で温和な歌が、子どもたちには受け入れられやすいと思いました。

宗我部 子どもたちにも、自然がもつ寓意性をいろいろ想像させながら、歌を作って遊ばせたら楽しい授業になりそうです。晶子の歌は、そういう指導にもつていきたいですね。

馬場 それは、いい授業ができそうですね。ぜひやってみてください。

宗我部 ぐつと現代に近づいた次の二首。

海を知らぬ少女の前に
麦藁帽のわれは両手をひろげていたり

寺山修司

宗我部義則

お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。埼玉県生まれ。平成20年告示中学校学習指導要領解説国語編作成協力者。編著に『中学校国語科新授業モデル 話すこと・聞くこと編』『夢中・熱中・集中…そして感動 柏市立中原小学校の挑戦！授業リフレクションで校内研を変える』、共著に『読解力再考 すべての子どもに読む喜びを—PISAの前にあること—』など。

思い出の一つのよう

そのままにしておく麦わら帽子のへこみ

俵 万智

馬場 寺山の歌は、彼が若いときに作ったものです。昭和三十年代。でも、なぜか新しさを感じる。しかも、この歌をはじめ、寺山は生涯文語で作歌していたんですよ。

宗我部 文語でも、口語的なイメージを感じますね。

馬場 内容が新鮮だからでしょうね。でも、寺山の歌は字余りがありますが、「海を知らぬ／少女の前に／…」と、五・七・五・七のそれぞれにきちんとした意味の切れ目があります。それに対して、完全に口語で歌う俵の歌になると、韻律と意味の切れ目が一致していない。

宗我部 「思い出の／一つのようで／そのままに／しておく麦わら／帽子のへこみ」。子どもたちは、そう切って読みそうです。

馬場 「句割れ・句またがり」というんで

宗我部 与謝野晶子の歌は、

川ひとすぢ菜たね十里の宵月夜
母がうまれし国美しくしむ

この一首を選んでいます。

馬場 「宵月夜」なんてすごく古い言葉なんだけど、綺麗な言葉ですよ。夕暮れの月夜」と言ったら八音になりますが、凝縮すると「宵月夜」という五音になる。凝縮した言葉には力が生まれ、意味がすごく浸透します。アピールの力が強くなる。そういうことも発見してほしいんですよ。

宗我部 「川ひとすぢ」と強い入り方をし、最後には「美しくしむ」というウ段の音が重なる柔らかさに変わっていく面白さがいいですね。

馬場 そこが晶子独特の、いいなと思わせる場所ですよ、きつと。

宗我部 「美しくしき」ではなく「美しくしむ」。そこに、ふわりとした日本語の美しさがある。声に出して読み味わいたい歌ですね。

馬場 この歌は、宵月夜という風景の中に、二重写しに母の優しさを重ねている歌い方なんです。喩を用いた、どちらかというと古典的な歌い方ですよ。それに対して、茂吉は、自然に深いものを見ようとしている。自然の一点をキツと捉えて、もつと深いと

すけれど、こういう口語短歌ならではの面白さも、ぜひ知ってほしいと思います。

宗我部 後に続く教材「短歌十二首」の中からは、次の一首について、ぜひおうかがいしたいと思っていました。

観覧車回れよ回れ
想ひ出は君には一日我には一生

栗木京子

現行の教科書にも掲載されている歌ですが、私があえて作者を伏せて、「この作者は男性？女性？」と子どもたちに問いかけてみたんです。すると、意見が真っ二つに分かれるんですよ。男の子が作った歌だという子どもがかなりいたんです。

馬場 男の子でもいいわね。草食系の男の子が、「君には一日我には一生」と言っている姿を思うと絶対面白いですね（笑）。

宗我部 「どうしてそうとらえるの」と問いかけると、「君」という言葉は、男の子のほうから彼女のほうにかけられる言葉として使いたい」という意見が出たり、「思い出が自分にとっては一生のものだというのは、やっぱり女の子の感覚じゃないか」という子がいたりで、そういう多様な読み方ができるところが、教材として短歌の良さの一つだと思います。

古典のリズムや語感は、

日本人の体と呼応させる力がある

宗我部



馬場 そうですね。おっしゃるとおり、短歌の読みは必ずしも一つじゃない。だから昔の歌だって、今は違った解釈をしているかもしれないんですよ。でも、それでいいじゃないですか。読みが三つあれば、三つの面白さがあるっていうことから。

宗我部 作り手の方の側からそういう言葉をいただく、子どもも教師も、すごく自信をもちますね。

馬場 もうその歌は、作った人の手から離れているんですよ。何と解釈されようと知ったことではないというわけです（笑）。

古典教材との出会わせ方

宗我部 馬場先生は、『源氏物語と能』『式子内親王』などの本も出されて、古典の造詣がたいへん深くいらっしゃいます。そこで、教科書に取り上げられた古典教材について、お話をおうかがいしたいと思います。

馬場 私が古典に親しんだのは、まず百人一首。それから平家物語です。ずいぶん覚えて、今でもソラで言えますよ。

宗我部 教科書では平家物語の「扇の的」を取り上げています。

馬場 いい場面ですね。声に出して読むと身に染みますね。

宗我部 平家物語や和歌に代表される古典文学のリズムや語感は、日本人の体と呼応させる力があるのではないのでしょうか。

馬場 私が教師だったとき、どうしても古典を伝えられるかと悩んだことがあります。自分がいくら面白がってやっても、それについてきてくれる子どもは極めて少ない。それで私は、もう古典は教え込む必要はないと割り切って、平家物語を講談風に読んでやっただけです。そうすると、子どもたちは古典の時間を楽しみにするようになったんです。一時間ずつと読んでやるんです。それで平家物語を好きになった子がいっぱいいました。宗我部先生が言われたように、やはり古典のリズムや言葉の響き

は、日本人をひきつけてやまない力をもっていると感じましたね。

宗我部 今、音読や朗読が改めて中学校でもクローズアップされているんですが、特に古典はそういう読み聞かせという方法に合っているんですね。

馬場 解釈なんていないんじゃないかって気もしますものね。

宗我部 三年生では「おくの細道」を学習します。私は、旅という言葉のもつイメージを自分たちと芭蕉とで比較してみよう、という授業をやってみました。子どもたちに旅のイメージをいろいろ挙げさせてみると、かなり重なったイメージをもっている。それはどういふことなのだろうと考えたわけです。どうも日本人にとっての旅というイメージの源が、この「おくの細道」にあるのではないかと思っただけです。

馬場 いいテーマですね。「おくの細道」を読んで私が面白いと思うのが、平泉に行くくと文体がガラッと変わる。それが、芭蕉

の感動を表しているんですね。ちょうど教科書に取り上げられている部分です。私は芭蕉の旅は、こうした未知と出会える、あるいは他者と出会うということがいけばんださかったんだと思うんですけど、さらにあの緊張した文章からは、何か自己を確認しようとしているところも感じますね。

宗我部 そのあたりを少しでも感じられたらと思って、その授業では教科書に出ている序章の「月日は」のところで「平泉」の部分に加えて、平泉までの所々をダイジェストして読ませたんですね。そしてさらに旅や句作に関する芭蕉の言葉をいくつか紹介しました。例えば、今先生がおっしゃった「未知との出会い」や「自己確認」ともつながりますが、芭蕉は「昨日の我に飽くべし」という言葉を残していますね。「細道」をあちこち読み、こんな芭蕉の厳しい言葉にふれたある生徒は、「確かに旅先での発見も、旅の目的でもある。だが、人は旅先での発見よりも、もっと大きな発見を、も

う一度自分の現実と改めて向き合ったときに得るのではないか」と書きました。未知と出会うことは自分と出会うことだったり、知っているつもりだった対象の本質みたいなものと改めて向き合うことでもあるのかなと思っただけです。

馬場 そうですね。能因にしろ西行にしろ、芭蕉にしろ、旅というものは、自分と対峙して何かを納得しようとするものではないかかったかと思えます。

宗我部 先生も、よく旅の歌を詠んでいらっしゃるんですね。

馬場 ずいぶん外国に出かけて歌を作っていますが、なるべく、歴史とか文化とかがないところを選んで行っています。だから、フランスには行ってないんですよ。ルーブル美術館なんか見ると、文化に圧倒されて歌を作れないから。

宗我部 それって、松島で芭蕉が口をつぐんでしまうのと同じですね。

馬場 ほんとにそうですね。だから私が行

くのは砂漠です。アフリカに行ったり、それからシルクロードをずっとたどって、三蔵法師が行った火焰山（かえんざん）を越えてみたり。そういう文化果つる地に行くと、人間がこんなところでどうやって生きてるんだろうという気持ちが湧き、歌ができます。私は、絶えずそういう原点というものにつながっていないと歌が生まれてこないんですね。

歌が生まれるとき

宗我部 今、歌の「原点」というお話がありました。馬場先生が詠まれる歌は、先生がそのまま自身を語りかけてくるような感じがしています。例えば、

西行のさくらありわがさくらありて
小さけれどもわがさくら咲く

この歌にはものすごく感動しました。凛として咲く、先生ご自身の姿勢のようで。私も、いつかこういうふうにならなうわがさくら

絶えず人間の原点と

つながっていないと歌は生まれない

馬場

新しい生命力に満ちた言葉を

どんどん生み出してほしい

馬場

咲く」と言いきれる我でありたいなど。

馬場 小さい桜ですよ（笑）。

宗我部 最近の作品では、「おばあさま」という十三首の連作はユーモアにあふれていますね。

おばあさまは「丹波の山ぎる」と
あいさつし幼きわれはいたくおどろく

霧降れば海の底なる丹波より
駆け落ちしてきたおばあさまです

馬場 口から出た言葉がそのまま歌になっていますが、そういうのも歌の伝統にはあるんですよ。

三歳か四歳のときの祖母の記憶です。「丹波の山ぎる」ってなんだろうというのがずっと疑問で、丹波のご出身の河合隼雄先生にお目にかかったときうかがったら、「あんな知らないのかいな。あそこは猿の国で、人間が少しばかり住んでるのや」とおっしゃった。「先生はどっち？」ってきいたら「人間や」って（笑）。少しの人間がいるというのがとてもユニークでしょう。

宗我部 そんなエピソードもうかがうと、歌のイメージがどんどん広がって、とても面白いですね。

馬場 短歌というのは、こういう口から出たままを歌うこととか、いろんなことができるんです。やっていくと、だんだん面白くなります。ぜひ作ってみてください。

宗我部 面白そうですね。ところで、先生は、初心者に対して、歌の作り方をどう教えていらつしやるのですか。

馬場 私は、「身の回りのものや出来事を、全部五音か七音で言ってみよう」と言っています。例えば「今日の暦で『大寒の』」

さくら花幾春かけて老いゆかん
身に水流の音ひびくなり

私たちは、桜を何度も何度も見ながら年をとっていきます。だから昔の人の歌集には、必ず毎年の桜の歌がある。しかも、年々に桜に託した人生観が変化していくのが読み取れて面白いんです。そういう「もの」と経験とのつながりも、言葉の豊かさに関係してくるのではと感じています。

宗我部 言葉が豊かになっていくというのは、言葉が表す意味と、対象そのものの、それと自分の経験がつながっていくことなのですね。

馬場 そう。だから「短歌十二首」の中の、桜はないのち一ぱいに咲くからに
いのちの生命をかけてわが眺めたり

この歌を教えたなら、ぜひ満開の桜の木の下へ連れて行って、桜の花びらを浴びさせたい。満開の本当に美しい桜を見せてやれ

岡本かの子

豊かな言葉をつむぐ

馬場 特別な言葉でもなく、今見ているものから始める。初めは即物的ですよ。でも、それだともまらなくなるから、最後の七音を「頑張れと言う」「私は憐れむ」などとしてみる。ほかは即物的でも、最後の言葉でその人固有の場を作ればいいんです。それが叙情なんですよ。最後の一句がね。

宗我部 そういう積み重ねが、豊かな表現を生み出していくということですね。

馬場 いきなり豊かな言葉は獲得できませんし、言葉の発見は、ぼんやりしてはできません。心が生き生きと動いていることが必要なんですよ。

宗我部 私たち国語の教師は、「豊かな言

ば、「いのち一ぱいに咲くからに」という言葉もすつと身に入るはずですよ。そういう現場と言葉のつながりはとても大事です。

宗我部 そうですね。私も、言葉を学ぶときには、教室で頭の中だけで学ぶのではないなと思うています。可能な限り、その言葉の生の現場に立ち会わせていくということは大事ですね。

馬場 自然の中に出てみると、花に鳴く鶯、水に棲む蛙の声が聞こえてきます。すると、どうしても歌を詠まないでいられようかという気持ちになる。これは生命力、命が共鳴し合うからなんですね。若々しい生命力を秘めた子どもたちに、ぜひその共鳴を新しい言葉でつむぎ出してもらいたい。

宗我部 この教材のタイトル「新しい短歌のために」には、そうした先生の思いが込められているんですね。

馬場 そうです。教材の末尾を、「短歌は今も、若い世代による若い言葉を守っているのです。」と締めくくりました。短歌はその時代の言葉や韻律を含み込みながら、千三百年、脈々と新しい生命を歌い継いできました。伝えられてきた美しい言葉大切にすればかりでなく、これからの時代にふさわしい新しい生命力に満ちた言葉を、どんどん生み出してほしいと願っています。

言葉が豊かになるとは、意味と対象、経験がつながっていくことです

宗我部

